



## 鯨坂学・小松秀雄編『京都の「まち」の社会学』

著者	鯨坂 学
雑誌名	同志社社会学研究
号	13
ページ	77-79
発行年	2009-03-31
権利	同志社社会学研究学会
URL	<a href="http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000012004">http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000012004</a>

## 鯨坂学・小松秀雄編 『京都の「まち」の社会学』

世界思想社（2008）

鯨坂 学  
AJISAKA Manabu



筆者は3歳から京都市内で育ち、大学を卒業してから四半世紀の間に、大阪、神戸、岡山、広島と職場や住居を移り、13年前に京都に戻ってきた。その間、毎年数回は京都を訪れてはいたので、その変りようを目にしていた。特に80年代半ばから京都の「まち」は急変したと感じていた。また、ヨーロッパ、アジアの都市を中心に、かの地の都市を見る機会も数回あった。これらの経験が、筆者の京都という都市を見る座標軸をもたらしたと思う。

京都に戻ってきて10年ほどの子育て期には、郊外の関西学術研究都市に拓かれたニュータウンに住んでいたが、一昨年に縁あって子供のころから育った左京区の旧住宅街に住むようになった。これを機会に、家族や友人・学生と出来るだけ京都の町・街を訪れようと考えようになった。最初は寺社仏閣から始めた。次いで京都の伝統行事や伝統産業についてのフィールドワークを始めた。

06年秋に立命館大学で開催された日本社会学会大会の地域部会で司会をする機会があり、そこで報告した諸氏を中心に、知人らと京都の社会に関する研究会を始めた。魅力が尽きない京都の町・街であるが、その歴史については硬軟あわせて、多くの研究成果がある。観光がらみの「京都本」は、ガイドブックを含め、ずいぶんと書店に並んでいる。しかし、社会学を含めて、近代・現代における京都の経済・産業や政治・行政など

についての実証的成果は多いとはいえない。

江戸・明治・大正期の研究を見ると、京都は工業都市・産業都市であったことがわかる。統計を調べてみると80年代までは、京都は繊維産業を中心に高度で繊細な付加価値の高い工業製品＝高度な「ものづくり」の都市であったといえる。そして、これらを担う職人やそれらを扱う商人によって運営されてきた各「町」（ちょう）の自治により京都の「まち」や「まつり」は維持されてきた。ところが、著者らが数年前に行った「京都らしさ」に関する市民アンケートでは、市民は「京都らしさ」として、寺社仏閣や自然景観などを挙げている。多くの市民は、京都が産業都市であったことや「町」の自治のことをあまり認識していない。もちろん、一方で京都は、観光都市、歴史都市として国内外からの多くの訪問者を受け入れてきた。

ところで、「美しい日本」を語る多田富雄（免疫学者）氏は、その美しい日本のルーツとして四つの要素を挙げている（2008年6月20日付け朝日新聞）。アニミズムの文化（自然崇拜、自然信仰）、豊かな「象徴力」、「もののあわれ」という美学、それらを技術的に包み込む「匠の技」の四つである。これらの特徴が日本の美のみならず、日本人の行動の規範になってきた。

京都の「まち」や社会は、まさにこの4つが凝縮されていると考えられるであろう。京都は三方を幽玄とした山や川に囲まれている。その麓には

神仏混交の歴史を持つ、自然を崇拜するさまざまな宗派の寺や神社が存在する。公家や大名に賞賛された、茶の湯や華道、伝統工芸も「京もの」としての表彰性、象徴性を持つ。京都人は芯はしっかりしているが、表向きは争わず、「はんなり」として「もののあわれ」をかもし出す。最後はさまざまな伝統工芸を担ってきた職人の世界、それを流通させてきた老舗の存在がある。

伝統的な建築物である桂離宮や修学院離宮、家元の庵、伝統的な町家を訪れると、また都心に残された職人の仕事にふれると、これらが「美しい日本」の四つの要素を濃縮した京都の表彰であることに納得する。しかも、戦災の被害が軽微であったので、伝統的な景観もかなり残ってきた。これらのことを、共通の了解として本書は以下のように編まれた。

## 序

- 第1章 京都の伝統産業と「まち」の移り変わり (鯉坂 学)
- 第2章 京都の地域コミュニティと地域運営アソシエーション (田中志敬)
- 第3章 祇園祭の山鉾町のアクターネットワークと実践コミュニティ (小松秀雄)
- 第4章 卓越した生活景としての京都の景観 (中林 浩)
- 第5章 京町家の社会学 (逢 軍/中村 圭)
- 第6章 京都の舞妓・芸妓を生みだす力 (竹中 聖人)
- 第7章 京都と観光 (河野健男)
- 第8章 京都の老舗の社会学 (細辻恵子)
- 第9章 京都の町と職人 (山本正和)
- 第10章 京都市のイメージと「京都らしさ」 (鯉坂 学)

あとがき

本書の執筆者の全ては、京都市内の大学で学んだ経験を持つ。また幾人かは京都生まれか、京都育ち、そして京都在住である。京都生まれの2人は、老舗の流れを汲む者である。皆が京都びいきであると共に、京都の現況と行く末に一抹の不安を持っている。

今回は、10章にわたる京都の「まち」や伝統について検討を行ったが、多様な京都の社会を描くには、多くの残された課題があることも、次第に分かってきた。まず、京都の伝統産業を含めた産業構造の実態やその担い手については、まだまだ明らかにされていないことが多い。衰退局面にあるとはいえ、都市内にあるこれらの伝統産業や地域社会と結びついたフレキシブルな社会システムの解明が必要であろう。ついで、これらの京都の産業や企業、それぞれの「まち」のあり方を連接・接合している京都の政治・行政の特徴＝都市の権力構造を考察せねばならない。伝統的な産業の結節である同業者組合や商工団体、仏教会や神社関係団体、大学・学校や博物館・文化センターなどに勤務する知識人・専門家を媒介にして、保守勢力と革新勢力の対抗とコアリッションが見られる。この対抗関係は、特に京都市長選挙の度にその政治構造の鋭さを見せ、「京都らしい」都市づくりのあり方・開発の方向を巡って顕在化してきた。

また、京都社会の独自の領域を占めているお寺や神社、茶道や華道、能や狂言の家元制度についての研究も興味が尽きない。そして老舗や伝統産業を支えてきた町衆といわれる京都の有力者やその方々のネットワークについても研究がなされることが求められている。さらに、京都には戦前期からかなりの在日外国人が居住しており、伝統産業の担い手としても一定の役割を果たしている。近年のアジアからの留学生の増加も含めて、京都社会におけるこれらの外国人のことも忘れてはな

らないであろう。付言すれば、全国の都市で最も集積の密度が高いといわれる大学や研究者、そこで学ぶ学生・院生の実態についても検討がなされなければならないことであろう。

本書が京都の町や街、祭りや景観、老舗や職人などについて関心をもっておられる学生・院生や市民の方々に読まれることを願っている。